

子ども・生徒の「新聞づくり」とNIE

— 「紀の国わかやま総文2021」に寄せて —

和歌山県NIE推進協議会会長 和歌山大学教育学部教授 船越 勝

コロナ禍で揺れた2020年度もいよいよ年度末を迎えているが、私のゼミでも現在10人のゼミ生がそれぞれのテーマで卒業論文に取り組んでいる。そのうちの一人の土居直樹さんは「学級新聞づくり」をテーマに卒業論文を執筆した。総字数は7万字に迫る力作だ。土居さんは元々書くことや作文教育に関心があり、それらについて研究を続けてきたが、途中から自分が和歌山市立高松小学校で学んでいた時に一生懸命に取り組んだ「新聞づくり」のことが思い出されて、「学級新聞づくり」をテーマにすることに変更したのである。驚いたことに土居さんは、10数年前に自分が作成した、小学校5年生の時の「算数新聞」等を保存しており、それも実践事例の一つとして卒業論文で分析したのであるが、このことは小学生であった当時の土居さんにとって、この「新聞づくり」の活動がどれほど楽しい、記憶に残る活動だったのかを物語っている。また、土居さんはなかなかの名文家でもあるが、それはこうした「新

聞づくり」を通して書く力が育まれたということもできるだろう。このように、「新聞づくり」を含めたNIEの活動は、子どもたちや生徒たちにとって意味ある学びの活動を創り出し、彼ら／彼女らを力のある学び手に育てていくのに大きな教育的価値を持っているということができる。

さて、高校生の「文化部のインターハイ」と呼ばれている第45回全国高等学校総合文化祭、「紀の国わかやま総文2021」が、本年7月31日から8月6日にかけて、和歌山市をはじめとした県内各地で開催される。全国の高校の文科系部活動の全国大会であり、全国の高校生たちが一堂に集って発表・交流する場だ。私たち和歌山県NIE推進協議会も、この「紀の国わかやま総文2021」を全力で応援している。この全国高等学校総合文化祭には、各部門の取り組みがあり、「新聞づくり」やNIEに関わっては、各高等学校の新聞部を基盤とした新聞部門があつて、8月3日から6日にかけて、和歌山市の開智

高等学校で開催される。NIEの活動は、このような新聞部の活動だけでなく、授業のなかでの「新聞づくり」や「学級新聞」など様々な広がりを持っているが、しかし、生徒の自主活動としての新聞部の活動が、生徒たちが世界や地域の現実をリアルに見つめ、自らの見解を自由闊達に展開していくことのできる思考・判断・表現を中心とした資質・能力を身に付けていくことに大きな価値を持っていること、さらに、生徒たちの健全な世論形成を通じて、学校づくりのパートナーとして育ち、生徒が主役の学校づくりに大きな役割を果たす可能性を持っていることは言うまでもない。

い。しかし、こうした新聞部の活動も含めた生徒の部活動や自主活動が、一部ではあるが、参加者の減少など停滞を余儀なくされていると指摘されていることは、非常に残念なことである。だからこそ、今回の「紀の国わかやま総文2021」をきっかけとして、参加した高校生たちが全国の多くの仲間と出会い、相互に学び合いながら、自らの部活動の発展の契機とし、また一人ひとりのさらなる成長にもつなげていってほしい。

和歌山県NIE推進協議会を代表して、「紀の国わかやま総文2021」の成功を心からお祈りしている。



「紀の国わかやま総文2021」公式ポスター

新聞を活用した 教材作成の可能性

和歌山大学教育学部附属小・中学校 校長 北垣 有信

昨年10月に開催された「和歌山県NIEオンライン実践報告会2020」に参加させていただいた。「新聞を活用した教材作成」は、教諭の頃の私が拘っていた教材開発作業の重要な柱の一つであったが、それは過去に参加したこのような実践報告会から得られた多くのヒントによるところが大きかったことは、言うまでもない。今回の報告会では4本の素晴らしい実践発表の講評をさせていただくことになり恐縮だったが、その後に少し私の実践をお話しする機会をいただいた。

中学校国語科の教員であった私は、「教材はどこにでも落ちている」を信条の一つとして、新聞・TVニュース・ネット等とはよりお店や旅行先のパンフレット・看板など些細なものを見つけては授業で活用することが、趣味？でもあった。毎朝目を通す新聞は、勿論大好物となるわけで、例えば……。

ある日の朝刊に「諷める長男 父、怒り刺す」という見出しを見つけた。これだけでは「長男が父を刺す」のか「長男を父が刺す」のか、判別しにくい。そこでサブ見出しを見ると「〜おかし

戦う「彼と結婚する」のよう動作の相手を示すものであり、対して後者は、「私と彼」「りんごとメロン」の並立関係で両者は対等な関係である。見出しに戻れば、フジが和解の主体であるが、フジとライブドアが対等であるか、子供たちの関心が次第にそちらに向かっていくことになる。こんな小難しいことを、時代状況の中にある見出しは極めて雄弁にその差異を語ってしまうのだ。こうした言葉の面白さを発見し、新聞がいかに言葉を吟味しているかを感じさせる取組は、その後の様々な教科学習の場面においても有効に働く力となっていく。

また、別の日(2007・4・19)の第一面には「フジ、ライブドアと和解」とあった。この「と」の用法は実に絶妙で、「フジがライブドアと和解した」と「フジとライブドアが和解した」では、印象(というより事実そのもの)が大きく違う。文法的に言えば格助詞「と」、前者は、「悪と

事の子供見出し「〜走行の妻に感謝〜」(2007・12・3)は、結婚を機に妻のトレーニング法を取り入れた選手の夫婦愛を「糟糠の妻」という故事に掛けた例にと、楽しい見出しを見つけては子供たちと楽しんできた?のである。

講評の中でも紹介したが、北海道の中学校社会科教諭池田泰弘先生は、こう述べている。「……新聞は私にとつての生活の一部である。学生時代に社会人が毎朝電車内で新聞を四つ折りにして読む姿を見かけ、新聞は社会の窓口であると考えていた。幼い頃から家庭で新聞を読む習慣は、教材を探す習慣として継続化している。起床後、主体的に活字に接することによって、記事と対話し、新聞が伝えた内容や主張の意図を深く考えている。……それを授業に具現化でき

教育に新聞を

エヌ・アイ・イー
和歌山県NIE推進協議会
ホームページを活用ください
～和歌山県の新聞活用授業実践例を紹介したサイトです～



アドレス=<https://nie.kiiminpo.jp>

ないか。」「内外教育」8/25号)

4コマ漫画を活用したノベライズやコマの並べ替え創作文、同日コラムの四大紙比較による主張分析、読者投稿エッセイの分析・批評等々、新聞はまさに教材の宝庫である。先生方の発掘力に大いに期待したいと思っている。

広域からの参加を促進する オンライン会議の可能性

新宮市教育委員会 教育政策課 指導主事 竹村 伸也

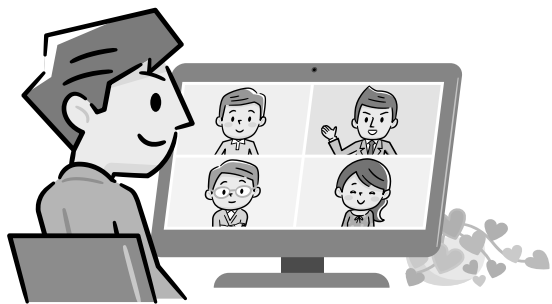
令和2年10月10日、「和歌山県NIEオンライン実践報告会2020」に参加させていただきました。今年度は新型コロナウイルス対策もあり、オンラインでの実施ということでしたが、県内各地より多くの先生が参加されました。また、当日は台風14号の影響もありましたが、オンラインということで、離れた場、そして交通状況を気にすることもなく参加が可能となりました。

令和2年10月10日、「和歌山県NIEオンライン実践報告会2020」に参加させていただきました。今年度は新型コロナウイルス対策もあり、オンラインでの実施ということでしたが、県内各地より多くの先生が参加されました。また、当日は台風14号の影響もありましたが、オンラインということで、離れた場、そして交通状況を気にすることもなく参加が可能となりました。

国の緊急事態宣言を受け、臨時休業から始まった今年度の学校現場。様々な行事が中止に

なる中、研修についても集合型ではなく、ICTを活用したオンライン研修の開催が増えてきました。このNIE実践報告会についても、例年は和歌山市に集まって開催されていましたが、今年度はオンラインということ、新しい取り組みがなされました。

自分が入っている新宮市は、和歌山市内まで約3時間。往復6時間かかります。オンラインを活用することで、今までかかっていた時間を他に使うことができます。つまり、時間の制約を気にせず、今までよりも気軽に、手軽に、画面



報告会では、小中高3校1グループの実践が発表されました。発表を聞かせていただきながら、過去に自分が取り組んだNIEの実践を振り返ることができました。3年前、県NIE事務局からお話をいただき、小学校6年生で新聞を活用し、「まわし読み新聞」と「新聞コンクール」の2つを中心に行いました。(研究内容は実践報告書2017(平成29)年度)をご覧ください。その時から考えていたことですが、いかに子どもたちに新聞に親しませるか、がポイントとなってくると感じました。

革により減少しており、その反面スマートフォンや電子媒体等のメディアが増えています。そこでニュース等に触れる機会もあるかと思えますが、紙には紙の良さもあり、まずは新聞に触れる機会作りも必要だと思いました。

現在、学校現場ではIGAスクール構想が加速しながら整備されつつあります。教育を取り巻く現場は今まで考えられなかったような速さで変革しています。「ICTは苦手だから…」ではなく、「ちょっとやってみようかな。」と、一歩踏み出してみることが大切なのではないでしょうか。今年度のオンライン開催という取り組みで、新しい扉が一つ開かれたと思います。ICTを活用して、さながら「どこでもドア」のように、どこにいても集まれる形式は、地理的に南北に長い和歌山県においても有効な手段なのではないでしょうか。

集合型では会場の雰囲気等も感じられることなど、集合型の良さもあります。オンライン上での研修を考えると、そういった部分では改善点もあるかもしれません。通信環境やPCの不具合など、まだまだ課題はあるかと思いますが、今後「ちょっとのぞいてみよう。」と気軽に参加される先生が増え、より充実したNIE実践報告会になること、また新聞を活用した取り組みがさらに推進され、子ども達に読解力や表現力、「コミュニケーション能力等、様々な力がついていくことを期待しています。

実践した3年前、新聞を定期購読している家庭は半数以下で、ICTの進んだ現在では更に下がっているのではないかと考えられます。新聞だけでなく印刷物自体が、多様な社会構造の変

革により減少しており、その反面スマートフォンや電子媒体等のメディアが増えています。そこでニュース等に触れる機会もあるかと思えますが、紙には紙の良さもあり、まずは新聞に触れる機会作りも必要だと思いました。

現在、学校現場ではIGAスクール構想が加速しながら整備されつつあります。教育を取り巻く現場は今まで考えられなかったような速さで変革しています。「ICTは苦手だから…」ではなく、「ちょっとやってみようかな。」と、一歩踏み出してみることが大切なのではないでしょうか。今年度のオンライン開催という取り組みで、新しい扉が一つ開かれたと思います。ICTを活用して、さながら「どこでもドア」のように、どこにいても集まれる形式は、地理的に南北に長い和歌山県においても有効な手段なのではないでしょうか。



「いっしょに読もう! 新聞コンクール」

全国奨励賞に 海瀬 歩実さん(和歌山市立高松小5年)

玉置 友愛さん(白浜町立南白浜小5年)

日本新聞協会は、このほど第11回「いっしょに読もう! 新聞コンクール」の受賞者を発表しました。

全国から57,977編の応募があり、小・中・高校部門の最優秀賞を各1編(合計3編)、優秀賞を校種別に各10編(合計30編)、奨励賞を120編選んだと発表がありました。また、団体応募校の中から、優秀学校賞を小・中・高校各校の合計15校、学校奨励賞158校が選定されています。和歌山県内では、小学校219編、中学校271編、高校2編で合計492編の応募がありました。

そのうち全国審査会で、奨励賞に和歌山市立高松小学校5年の海瀬歩実さん、白浜町立南白浜小学校5年の玉置友愛さんが選ばれました。学校奨励賞に和歌山市立高松小学校、海南市立東海南中学校、県立日高高等学校附属中学校、すさみ町立周参見中学校が選ばれました。

そのうち県審査会において、優秀賞に24名、奨励賞に33名を選定しました。県内の受賞状況は、和歌山県NIE推進協議会ホームページ(<https://nie.kimipj.jp/>)に掲載しています。

おり、作品の提出締切りは、2021年9月8日(水)です。多くの学校、多くの児童・生徒の皆さんの参加をお願いいたします。

なお、応募の詳細については、日本新聞協会NIEホームページ(<https://nie.jp/>)をご覧ください。



玉置 友愛さん



海瀬 歩実さん

※写真掲載は保護者の了解を得ています

いっしょに読もう! 新聞コンクール

日本新聞協会は、今年も「いっしょに読もう! 新聞コンクール」を実施します。家族や友人といっしょに記事を読み、感想・意見などを書いて、記事とともに応募いただく新聞感想文コンクールです。

1 新聞を読む



2 記事を決めよう



3 記事を読んで考えたことを書こう



4 家族や友だちに意見を聞こう



5 まとめよう



6 応募しよう



●対象：小・中・高校・高等専門学校生

●募集要項：2020年9月9日～2021年9月7日の新聞協会加盟社等が発行する新聞から興味を持った記事を切り抜き、家族や友だちにも見せて意見を聞いたり話し合ったりしたうえで、応募用紙に記入して記事といっしょに送ってください。

●応募締め切り：2021年9月8日(水)必着

主催：一般社団法人日本新聞協会

コンクールの詳細(応募・問い合わせ先、対象紙一覧など)▶NIEウェブサイト <https://nie.jp>